

アドベント礼拝 2020年12月13日(日)

題 「ヨセフを忘れない」

テキスト：マタイによる福音書1章：18～25節

(聖書の箇所は最後にあります。)

アドベントの日々を感謝しています。

アドベントに入って礼拝では、神の子イエスをやどした乙女マリア、その前にイエスの到来を伝えた洗礼者ヨハネを身ごもったエリザベトの姿を聖書から見ました。今日は乙女マリアのいいなずけであったヨセフのことをご一緒に心にとめたいと思います。

マタイによる福音書に記された場面から、クリスマスを迎えるための信仰の糧を頂きたいと願っています。

小見出しに「◆イエス・キリストの誕生」とあります。「18:イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。」とあります。

イエス・キリストの誕生の次第が語られていますが、イエスを身ごもった時、母となったマリアはヨセフと婚約していたということです。聖書によればマリアは聖霊、つまり神さまの力によって身ごもったのですが、約2000年前のユダヤ地方では、婚約することは法律的には、結婚していることと同等だったようです。このことがマリアのいいなずけヨセフを苦しめることとなります。ヨセフの年齢は不詳です。マリアと同じ土地ナザレの人であったと思われます。仕事は大工であったと思われます。20節に「ダビデの子、ヨセフ」という天使の呼びかけがありますので、血のつながりで言えば、イスラエルの12部族でダビデ王が属していたユダ族の末裔だと思われます。ヨセフの人となりは12節に記されています。

19:夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。

マリアの夫ヨセフは「正しい人であった。」と言われていています。この「正しい」とは他の聖書の訳では「義人」つまり律法や掟に忠実な人のこと。「曲がったことの嫌いな人」また「憐み深い人」と訳されています。旧約聖書には族長ヤコブの子で神さまの働きに用いられたヨセフが登場しています。ちなみにヨセフという名前には、「神が恥を取り除いてくださった。」とか「1人の子を加えてくださった。」という意味があるようです。

なんとなくヨセフという人の人柄が分かるようです。今日でもこのような人はいることでしょう。マリアに起こったことは、ヨセフに不安と恐れをもたらします。自分が大切にしていた価値観を壊される経験をしたでしょう。自分の犯した過ちではないのに、ヨセフは心の暗闇を体験し、どん底に落ちたのです。苦悩の末、ヨセフは身ごもったマリアを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心したのです。

これは、マリアとの法的な婚姻関係をヨセフの方から解消するとということです。このことは当時の律法、法律では可能だったのです。

ちなみにこの時マリアの妊娠が他の人たちに分かっていたら当時の法律では姦淫の罪でマリアは「石うちの刑」に処せられるのです。「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに」とあります。ヨセフは、マリアを石うちの刑にあわせたくなかったのです。ここにヨセフの配慮とやさしさを見る思いです。自分から離婚させれば、マリアは石うちの刑にはされないのです。

御子イエスの誕生の前に、こんな苦しみの体験をした人、ヨセフがいたことを忘れたくはないのです。

さて、

「20:このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」

「このように考えていると」とありますが、これは「思案している」とか「疑い、苦しんでいる」ともとれます。その時、ヨセフに天使が夢であらわれます。マリアに表れた天使ガブリエルかもしれません。神さまのことばをまっすぐに伝えます。神のことばは、神さまの心であり神様の計画、救いの計画です。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」「恐れずに」と言います。どんな強そうな人も、人間は恐れるのです。天使は言葉を重ねます。

21:マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。「イエス」とは、ヘブライ語の「ヨシュア」で「主は救う」という意味です。キリスト者の人で「ヨシュア」とか「ヨシア」という名前の人もありますが、名付けた人はキリスト者であったと思われるます。

神の子イエスは自分の民を罪から救われるのです。罪は「的はずす」ということです。イエスさまは神さまという的をはずす人間をまことの神に立ち帰らされるのです。これが救いです。この救いの計画は、今起こったことではな

く、昔の預言者の口を通して語られた神さまのことばが実現することなのです。

23:「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。これは預言者イザヤのことばです。

あわれみ深い神は、悩み苦しみ罪に支配されている民、我々と共にいてくださり、罪から救い出し行く守り導き続けてくださるのです。

「24:ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおりに、妻を迎え入れ、」とあります。

ヨセフは天使が語った言葉を神の言葉として聞き、受け入れ。それに従ったのです。

ヨセフも苦悩の体験を経て救われたのです。

25:男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

このような苦しみ抜いたヨセフだったので、神の言葉に守られ、信仰と祈りを持ってマリアとイエスを様々な困難の中、守り通すことができたのだと思えるのです。

ヨセフを思う時、マリアを護り、御子イエスを護られた、インマヌエルなる神さまの憐みの深さを思うのです。ヨセフは神に立てられ、備えられた人であったと思います。マリアを受け入れイエスの父となった「ヨセフを忘れない。」人類を救うために御子イエスをこの世界に送ってくださり、イエスさまとマリアを護るためにヨセフを立ててくださった神さまに心から感謝したいと願います。

## ◆イエス・キリストの誕生

- 18: イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。
- 19: 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。
- 20: このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。
- 21: マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」
- 22: このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。
- 23: 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。
- 24: ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおりに、妻を迎え入れ、
- 25: 男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。